

6歳になった娘が、日常的に眼鏡をかけることになった。来年度から小学校に入るための就学時健康診断の視力検査で、あらためて眼科を受診するよう言われた。眼科で精密検査をしたところ遠視と診断され、眼鏡を使うことを強くすすめられた。

まったく予想していなかった展開に私は動揺し、正直なところ、とてもショックだった。診察室での医師とのやり取りにもそれが表れてしまっていたと思う。3歳児健診の視力検査ではとくに問題はなかったため、それ以降は検査を受ける機会がなく、日常生活において気になる様子はなかった。医師から、子どもは視力の調節機能があるため気づかないことも多いこと、遺伝的な要素以外に原因がないことを説明されても、気は晴れなかった。これまで気づいてあげられなかったことを悔やんだ。

診察室を出て、私は精一杯明るく「めがねをかけるんだね！」と娘に声をかけた。すると、娘は「やったー！ あたらしい。じんせい

はじまる！」と小さく飛び跳ねながら笑顔で言った。

予想外の娘の反応にとても驚いた。彼女が「人生」という言葉を知っていたことも驚きだった。そして、幼い頃から眼鏡をかけることはかわいそうだ、という思い込みを私自身が持っていたことに気づかされた。娘にとつては、眼鏡をかけることは「かわいそう」なことなどではないのに、一番近くにいる私がそう思わせてしまうところだったと思うと本当に情けない。この先何度か訪れるであろう娘の新しい人生のはじまりに、前向きに寄り添ってあげられる親になりたいと思う。

